日本現代詩大系

第五卷

近代詩

二

日本現代詩大系

第五卷

日本現代詩大系　普及版　第五卷

昭和二十八年一月二十日　印刷
昭和二十八年一月二十五日　發行

定價　貳百八拾円
地方定價　貳百九拾円

編者　矢野峰人
編集者　田邊典夫
　　柳澤棟三郎

發行者　東京都千代田區神田小川町三の八
　　河出孝雄

印刷者　東京都千代田區神田錦町三ノ二六
　　小笠原秀雄

發行所　東京都千代田區神田小川町三の八　株式會社　河出書房

第五回配本

凡例

一　本卷に收載した詩書の多くは今日容易にそれを觀ることができないため、能ふ限り原型を保存することに努めた。從つて抄出を餘儀なくされた詩書の目次はすべて各その冒頭に掲げて收載作品の全貌を窺ふに便とし、序文跋文も紙幅の許す限り採錄した。

二　表題と共にすべて初校本表紙の寫眞を掲げ、文末に發行年月日・發行所名・判型・頁數・および定價を記し詩書の型態を推測するに便ならしめた。記載中菊半截判（五・九×四・六）等の表示の括弧内の數字は縱五寸九分横四寸六分の謂であり、序文・目次等の頁數が奇數で終つてゐるのは裏白を含むの意を示したものであり、上製並製本の稱呼は前者はボール厚表紙本綴を、後者は紙裝薄表紙あるひはフランス裝等を表すものである。また序文・目次・本文等の頁數の記載の順序は各書の構成の次第による。

一　排次は原則として同一作者の下にその作者の詩書・詩篇を一括し、單行詩書の發行年代順に配列する方針をとつた。但し各作者排次の順は近代詩形成の史的發展を把へ得るやうの配慮の下に行つた。

一　收載した詩篇はすべて初校本を底本として用ひ、能ふ限り初出雜誌・流布本・全集本等をも參照したが、初校本保存の原則により字句においても行替や句讀點などの一般流布本と異る若干の箇處も、すべて初校本に從つたためである。

一　原本において脫落と認められる文字は（　）を附して補つた。

一　語法・用字などは作者の趣味や慣習によるので多少の混亂も整理せず、ただ漢字・歴語の綴などで印刷上の誤りと認められるものはこれを訂正し、且つ現行と異る用字のわきには〻を添へた。但し同一作者の同一誤謬には煩を避け初めの一語に添へるにとどめた。

一　漢字のふり假名は特殊のもの・二様に讀めるもの・まぎらはしいものだけを原本のふり假名の中から採り殘したが、音・訓とも全部に亙り字音假名遣・歴史的假名遣によつて訂正した。また原本には附されてゐないに拘らず前後の關係から必要と認められるものには推定したふり假名を（　）つけて附け加へた。なほ二三の特殊な場合であるが、初校本のふり假名に疑問を殘すものには（〻）と入れた。

一　巻末に作者作品及び起句目次を附し索引に便した。作者・作品の排次は本巻出頭の順に從つた。

一　本書編纂の資料は主として衣笠靜夫氏の藏書に據る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

目次

夜の舞踏 抄（人見東明）……三
戀ごころ 抄（人見東明）……七
愛のゆくへ 抄（人見東明）……九
獄中哀歌 抄（加藤介春）……一〇
眼と眼 抄（加藤介春）……一四
三富朽葉詩集 抄（三富朽葉）……一八
春の夢 抄（福田夕咲）……二六
自由詩社同人抄（佐藤楚白・今井白楊・齋藤青羽）……二九
珊瑚集 全（永井荷風）……三六
夜の葉 抄（森川葵村）……六三

道　程 全（高村光太郎）……六五
道程以後 抄（高村光太郎）……一三五
智恵子抄 抄（高村光太郎）……一四三
牧羊神 全（上田敏）……一四五
西灘より 抄（佐藤清）……二〇五
愛と音樂 抄（佐藤清）……二〇七
海の詩集 抄（佐藤清）……二〇八
雲に鳥 抄（佐藤清）……二一〇
スバル派詩人抄（茅野蕭々・平野萬里・長田秀雄・栗山茂・佐々木好母・千葉莫哀・長島豐太郎・出野青煙）……二一一
祈　禱 全（竹友藻風）……二三八
浮　彫 抄（竹友藻風）……二三四
馴　鹿 抄（竹友藻風）……二三五
……二三六

石庭抄（竹友藻風）……二三八
轉身の頌全（日夏耿之介）……二三九
黒衣聖母抄（日夏耿之介）……二七七
咒文全（日夏耿之介）……二八六
果樹園抄（柳澤健）……二九三
海港抄（柳澤健・熊田精華）……二九六
正午の果實抄（北村初雄）……三〇〇
樹抄（北村初雄）……三〇二
菊池香一郎詩集抄（菊池香一郎）……三〇四
末日頌抄（富田碎花）……三〇六
地の子抄（富田碎花）……三〇九
「時代」の手抄（富田碎花）……三一二
手招く者抄（富田碎花）……三一四
靈魂の秋抄（生田春月）……三一六

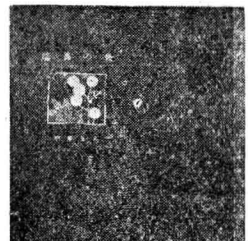
感傷の春 抄（生田春月）……三二九
慰めの國 抄（生田春月）……三三〇
象徴の烏賊 抄（生田春月）……三三四
默禱 抄（矢野峰人）……三三九
幻塵集 抄（矢野峰人）……三三一
影 抄（矢野峰人）……三三四
ゆふされの唄 抄（石川道雄）……三三六
燕石猷詩抄 ……三三七
爐邊子殘稾 抄（平井功）……三三八
利休 抄（齋藤潔）……三四二
よみがへり 抄（向井夷希微）……三四五
胡馬の嘶き 抄（向井夷希微）……三四七
解説（矢野峰人）……三四九

作者及び起句目次……三九一

扉字　矢野峰人
表紙意匠　坂本繁二郎
函装幀　恩地孝四郎

第五卷　近代詩（二）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.



夜の舞踏

人見東明

窓のあたりにのぼり來る薄ら明り
こぼれた白粉と紅の汚點に薄ら明り。

見のこした夢さへ青い窓のあたりに
ちんちろりんの鳴くさへも悲しい薄ら明り。

ちんちろりんが鳴けるとき
壁のみかかる壁の寂しさ。

窓のあたりにのぼり來る薄ら明り
こぼれた白粉と紅の汚點に薄ら明り。

無花果の果

光りをさへぎる葉の蔭は木をつたひ
悲しみはその蔭にひそんでゐる。

くろい光りと明るき闇とが頰ずり寄り
しのび泣きする今。

無花果の果はぼた……
ぼたりと落つる音の感觸と夏のシグナル。

樂屋の薄ら明り

目次――《映像》樂屋の薄ら明り　微光　春の心と吾がこころ　幕間の靜ひさきりげなく　微溫湯と花籠と　あはれ夢なりし　休憩室にて　林間のはてより　鑑祭の暮れがた　盲啞院にて　湯屋の書　待合室の　しばし　無花果の果　邪淫の蟲　琵琶　馬琳の女　よろこびの節　人形と朝　長唄の家　蟲籠　朝の歌　雪洞と花あかり　窓の悲しみ　秋のよこ顔　沈丁花　空より　もの思ひ　溫室の花　煙草のけむり　渚とゆふべ　眼ぞ悲し　延のベンチ　黄のなげき　銀笛のひとくさり　雲雀　美しき花束　つまらないから　鑑の鳥　玩具店にて　《春の夜の夢》解より　花し郊外の家　金絲鳥　相合傘の歌　平オロンの少女　湖畔の一夜　戀の歌とランプの媒　丘と酒　きえぬ間に　あとの屁　埠頭　の一日　青襟めし女　祭壇　トマトオ　公園の夜　わが小島　Yに與ふる歌　別れの夜　おとづれ來る女　《舞樂》寺院のひとき　冬の歌　墓畔のおとづれ　乳屋の二階　眠れる冬　谷間の花　雨ふる夜　赤き唇　蜻蛉　山より來る　春　接吻　記憶の戀　たえまなき夜の歌　髮のひとすぢ　《白壁》雨音無　底　患者室の一夜　嬰兒　敗殘のあと　飾り窓　赤き蟲と薔薇の花　帆を卷きゆく　生の海　日は白々と　沈默　果實店　落伍　墓地の白日　われひとり　小さな　巡禮　片へをめぐる寢顏の歌　酒場の一夜　《泉のほとり》夢のあと　青き鳥　のゆくへ　海のほとり　山麓の哀歌　眼　黑き風　闇夜の堂上　空な感「春」　よお前を　葉かげ　山麓の沼　藝色の匂ひ袋　哀愁の刻印　深夜　あまき悲し　み　浜車の窓より　丘の上の路　少女と薔薇　城の赤い旗　森　花園と寢室と　《跡なきもの》踵下にて　「悲しめる者」　丸樂　銅像のほとり　扉にふれて　風のおとづれ　青き花　佛師の家　福寨香　心のほとり　勒七日　簞笥の抽匣　しづかなる胴　西瓜のにほひ　悲しみの映像

こころ快げに半睡む夏の靜けさ
ぽた……ぽたりと落つる音のシグナル。

Yに與ふる歌

晴れわたる十月の朝明けの空
流れてゐる風のま白い光り。……
渚のほとりに
吾等二人はかつて立ちつくして
とほく海を見た。
煌かにかがやく空氣は淸見寺の屋根に、
ふりかへり見れば駿の山々に。

「柔かな心」の二人は
息をはづましてゐたこともあるのに。
あけぼのの光り繞る漁夫の軒端と
……濕めりゆく心の底で鳥が啼き……
思ひ出の窓に泣く女の眼光。

次第々々にうちしめる眼光
おまへの眼光よ。
消え行く者をしたふて柔かにひらめく
ふとおまへを想ひ出して今日も
曙の窓にもたれる。

……雨……音……點……

おともなく降る夜、
闇、
くら暗をかきみだす雨、音。
銀の線と……雨と、
沼の上に、
梢に、
凡て黑い世界の底へ。

……ぽつり……
……ぽつり……
おともなく降りそそぐ雨。

黒き音は
教會堂の階段をのぼり。

線は切れて音となり
點となり、
また線を引いて落ちる、雨。

墓を叩く銀の雨、
點、
崩れ落ちる雨、……音。

酒場の一夜

酒の上をぬめる夜
盃
眞白な指の先に涓り爪をつたふ夜。

繪となり小唄となりて
瓦斯の光りに溶け合ふ闇
青白い闇。

白い夜はため息を洩しながら
睫をつたひ
蜘蛛脹れした眼のふちをすべり落ちる

○

唇から
酒壺の内へ
盃の底へ迷れ込む赤い唄。

ひとつびとつの
酒泡を滑る
唄の節ぶし。

その唄にわがこころ泡立ち
燃え上り
火を抱くやうな心もち。

○

紅いろをした爪先きを頰にあて
ゑくぼを突いて
くろい眼が光つてゐる。

生欠伸を嚙みしめる

夜の舞踏

酒場の女の美しさよ。

「さあ、手を出せえ
斯うして何時までも握らうぢやないか」

○

赤い唇で
その臍を血の出るほど吸ふてやりたい。

蛇のやうに
擁きしめて。

其許の乳房に
指跡を刻みたいとおもふ。

○

さあさあ注いでくれえ
歡樂と酒と。

盃の底に、夜があり、死がある
不快な者が潜んでゐる。

享樂の世界を

銀の盃になみなみと滿へて飲まう。

その白い手を高くささげて
一滴ものこさず飲み盡さうではないか。

卵を飲むやうな口元をして
盃の縁を吸ふて見せてくれえ。

○

光りを亂し
薔薇の花瓣を散らす五月蠅の羽音の
囂しさ。

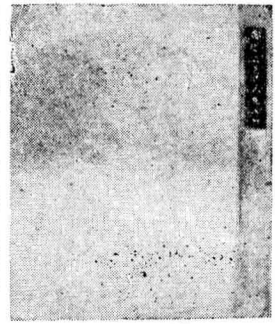
けれども、夜は熟睡を思ひながら
更け行き
窓に沁み入りて青く。

壁を匍這ふ影に
寂しい夢を浮べる深夜。

マントルを廻りつつ唄ふ
五月蠅よ。

五月蠅の聲は細まりつつ頸へて　悲しい眠りは尖る。

〔「夜の舞踏」・人見東明（圓吉）著。明治四十四年六月十日、扶桑社書店發行。體裁・四六判上製裝幀挿畫・齋藤與里。卷頭口繪二葉。カット七個。序詩一頁、例言二頁、目次一一頁、挿畫目次一頁、本文三一八頁、定價九十五錢〕



戀ごころ

人見東明

目次――《芽生え》尼僧の涙　古城のほとり　灯の眼　水死あり　戀ごころ
月夜の宴　いびらしと黒はすや　幣かなれ　ヨハネの首　瞼の憂愁　夢に入り
來よ　淋しければ　夢のかげにも　しのぶ　緋　峠へ　春とカナリヤ　哀傷の歌
芽生え　わが裏室の暗より　火藥のにほひ　氷嚢の下　霧島の花　腿の足あと
夢　鱗の反映　あやしき憂愁　心の一室　暮るる窓　古城と狂女　爪が切れると
き　《死魚の眼》死魚の眼　赤壁と夕陽　鷺の群　猶と蟲と　朝の微動　酔後
まぼろしの影　見えぬ鐘の音　小島の悲しみ　あはさひ　夢の停車場K
に興ふる歌　再びKに興ふる歌　映る影　何を思ふや　キスの朝　かへらぬ戀
戀ひそめし　戀の指跡　愛人よ　笛と鑑　雨の降る日　かへれる夢　その後
湯歸り　陰影　あるならば　針の光　後朝《心の術》笛を吹く　渚にて　心の
疲　水あさぎ　天窓の下にて　寂しさ　海の傳說　マスト　インキ壺　並木路
わかき旅人　なきさの砂　蝶突　朽ちた船　病床の夢　曳く影　しづ心なく
こころの鍋　病後　お通夜　停車場　あんまの笛　金魚の心　うはきもの　舞
ひ姿　朝刈　おいらん草　蔭に　夏のひる　こぼるるとなく　微風と夜光　夜
會草　楓と雨　《夢の花》雲雀の囀聞　淡い心　小さき姪　夢なりしか　さざ
音　夢の花　秋のサロン　シトロンの果　湯どの　秋雨の朝　淋しさ　秋の蟲

おしろいの匂ひ　月の夜　やもめ　何とはなしに　夜の散歩　水すまし　莢蓉
と女　ものの惱み　まやかし　床より　木の葉　あひびき　噴水　思はせ振り
窓より　カフエーにて　《無爲》ある少女のために　からことづて　無爲　う
たたね　水油　雨の朝　瓦草　しやぼん球　寂ふる朝　二人の夜　戀と瞬爐
もの勞れ　その時々　うすなさけ　山椒と雛妓　さる所にて　ある日ある夜
おぼこめきたる　影と思ひ出　朝がへり　戀の顔　ねたみ　期待　ひとりみ

芽生え

やはらかな鉢の土より
ささやかな土の中より眼ざめいづる
ダーリヤの芽のよろこびよ
照りそふ光りもにほふ。

にほやかに漂ふそのもとに
しろき足裏（あしうら）をそむけて眠る猫の
夢はくづれてとろとろと……
ほのあかき香のごとく。……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.